

問題は学生一人ひとりがどうやってインディペンデントな(独立した)人間になれるか、にあります。それを加害や被害の歴史を論じることと同時に並行してやらなければダメだと思います。例えば加藤典洋氏や竹田青嗣氏といった評論家はこう言います。これまで

の戦争責任論は、戦争経験というバトンを若い世代に受け渡す、若い世代はこのバトンを受け取るべき倫理的責任がある、と言ってきた。しかし受け取る・受け取らないは若い世代の自由なんだ(竹田青嗣)と。一見、若者の自発性を尊重するかに見えますが、その議論からは、【責任は他者IIアジアの被害者との間にあるもの】だということが欠けています。アジアの被害者たちの姿が消えている。戦争責任をとることを、自分たちの日本社会の中だけで済む問題として論じているのです。

時々「かなわんなあ」と思う人にも出会います。「日本はあなた方の国にこんなひどいことをしたんですよ」と涙ながらに言う、そう言われる私自身が引いてしまいます。ある種のカタルシスを求めているように見えます。日本社会の中で加害の歴史を訴える存在は少数派で、この社会の中で少数派としての生きにくさをたぶん感じているのでしょう。彼、彼女が求めているものは、その生きにくさをわかちあひ、自分を受け入れてくれる「場」なんです。加害の歴史について涙ながらに語ることで、自分が尊重される場。実はそんな場は、外に向かっている。ほとんど力が発揮できなくて、中に向かってても反省が深まらないのです。

当事者意識の無さに根拠があると思いません。自分は国家や社会に関係ないと思っていないですか? 日本国の主権者は日本国籍を持つ日本国民で、今の日本国の政策は日本国民が決定し、日本国の政策が間違っていれば日本国民の責任です。こんな簡単なことを何度言っても、わかってもらえない。学生だけじゃない、総電でくたくたになって帰っていくサラリーマンのお父さんたちに言っても同じです。国家と自分との関係をリアルに実感できないのは、彼らも疎外された被害者、国家の被害者であるからだと思います。もちろん、被害者だから国家の加害責任を問われたって困るというのは自己中心的な議論です。国家の命令で唯々諾々と戦場に行つて、相手を撃ち殺す人間にもそれなりの責任があるのと同じです。

「反省しなぐてはいけない」と言う。実は、その反応がとても心配なのです。教師が求めている答えを見つけて、そのとおりに反応するように習慣づけられているにすぎないと思えるからです。話を聞いてすぐに加害の歴史を自覚するのであれば、なぜ日本社会はいつまでも変わらないのか。いつも考えこんでしまいます。学生の中にはかならず一人か二人、「国と国との関係で起きたことを、自分に問われてもウザったい」と言う人がいる。私から見ればその答えは間違っている。ただその学生は、全員が教師に気に入られようとしているその流れに反発しているのです。とてもゆがんだ形で、自発性・自尊心を示そうとしているように見えます。

もしも若者がその「バトン」を拾わないと選択したとき、それは自発性だと言えるのでしょうか? 自分と他者との間に厳然と存在している責任を、無視したり、考えないようにすることで否認できる自発性とは何でしょうか? それは自発性ではなく、幼児的な「ジコチュー」自己中心的な自分の肯定そのものでしょう。アジアに謝る必要なんかないんだ、いまのままでもいいんだ、と。その意味で加藤氏や竹田氏の議論は、きわめてあぶない論理なのです。

平和運動や戦争経験を学ぶ学習会は、戦争を阻止することが目的は、そころろがそれを忘れて、「場」を維持することが目的になっていないでしょうか。いつも同じメンバーで、いつも同じ質問をして、いつも同じ答えに感動している。時々そんな小規模な勉強会で話をするのですが、本当に感動しているんだろうか、「加害の歴史」の話を書く「場」に身を置くことで安心しようとしているんじゃないか、と恐れます。

国家と自分との関係を感じることができないのは、国民の選択によって国家の政策が大きく変わったという経験が、ほとんどないからでしょう。60年安保から70年安保にかけての10年間は、敗北に終わったとはいえ、意思表示することでも何かが変わるかも知れないと思われた時代でした。しかしそれ以降は、社会に対する自己の当事者性を忘れ、過去の敗北をノスタルジックにふりかえるだけです。安保闘争で敗北した、しかし結果的にハッピーになった。給料は上がり、家は建ち、マイカーも持った。ポップカルチャーでも「自分はありのままでもいいんだ」「いまのままの自分を愛してくれ」と自己肯定のメッセージが流行している。痛恨の

### 社会の当事者意識はどこへ

なぜ戦争責任・戦後責任をとることを、日本社会はいつまでも忌避しつづけるのか。日本国民がその責任を自ら負おうとしないのか。私は、日本国民の社会への

### 若い世代に戦後責任をどう語るか

私は大学で、日本が朝鮮を植民地支配した加害の歴史を教えています。知識としてだけではなく、感性や論理で考えることができるように、文学作品や映像を紹介したり、ゲストを呼んだり工夫をこらしてきました。授業の感想を聞くと、95%くらいの学生が、素直に「知らなかった」「反省しなぐてはいけない」と言う。実は、その反応がとても心配なのです。教師が求めている答えを見つけて、そのとおりに反応するように習慣づけられているにすぎないと思えるからです。話を聞いてすぐに加害の歴史を自覚するのであれば、なぜ日本社会はいつまでも変わらないのか。いつも考えこんでしまいます。学生の中にはかならず一人か二人、「国と国との関係で起きたことを、自分に問われてもウザったい」と言う人がいる。私から見ればその答えは間違っている。ただその学生は、全員が教師に気に入られようとしているその流れに反発しているのです。とてもゆがんだ形で、自発性・自尊心を示そうとしているように見えます。

## 序詩

尹東柱

死ぬ日まで天を仰いで  
一点の恥なきことを、  
葉うらにそよぐ風にも  
私の心は苦しんだ。  
星を歌う心で  
すべて死にゆくものを愛さなければ  
そして、私に与えられた道を  
歩んで行かなければ。

今夜も星が風に吹かれる。

(徐京植訳)



朝鮮の詩人・尹東柱が1945年に獄死した福岡刑務所があった場所

特集 59年目の夏に——  
記憶を伝える場所

## 徐京植

# 歴史の忘却に抵抗するための場所

ソキョンシク 1951年京都生まれ。東京経済大学助教授。歴史と忘却、人権とマイノリティ、グローバリゼーションと民族問題について積極的に発言。著書に『ブリーモ・レーヴィへの旅』『断絶を生きる』『断絶の世紀 証言の時代』など多数。今秋10月から高橋哲哉氏らとともに、季刊「前夜」同人として戦争前夜に抵抗するメディアを開始。  
<http://www1.jca.apc.org/zenya/>

